

受 験 番 号	
------------	--

令 和 6 年 度

公立高等学校入学者選抜

学 力 検 査

国 語

(第 1 時 9 : 05 ~ 9 : 55)

注 意

- 1 「始め」の合図があるまで、開いてはいけません。
- 2 解答用紙は、この表紙の裏面になります。
- 3 「始め」の合図があったら、この表紙を取り外し、表裏それぞれの面に受験番号を記入してから、解答用紙が表になるように折り返しなさい。
- 4 問題は、8ページまであります。
- 5 問題は、第一問から第六問まであります。
- 6 答えは、全て解答用紙に書き入れなさい。
- 7 「やめ」の合図で、すぐ鉛筆をおきなさい。

令和6年度
公立高等学校入学者選抜学力検査問題

国語

第一問 次の問いに答えなさい。

問一 次の文の——線部①～⑥のうち、漢字の部分はその読み方をひらがなで書き、カタカナの部分は漢字に改めなさい。

・ 贈り物をきれいに包む。①

・ 屋上に望遠鏡を据える。②

・ 画用紙に顔の輪郭を描く。③

・ 池に釣り糸をタらす。④

・ 打ち合わせをメンミツに行く。⑤

・ 妹たちのけんかのチュウサイに入る。⑥

問二 次の文中には、誤って使われている熟語が一つあります。その熟語を、文意に合う同音の正しい熟語に改めて、漢字で答えなさい。

話し方に留意し、限られた発表時間の中で要点を完結に話す。

問三 次の行書で書かれた漢字について、○で囲んだa、bの部分に表れている行書の特徴の組み合わせとして、最も適切なものを、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

a—湯

b—茶

- | | | | | | |
|---|---|-------|---|---|-------|
| ア | a | 点画の変化 | — | b | 点画の省略 |
| イ | a | 点画の連続 | — | b | 点画の省略 |
| ウ | a | 点画の省略 | — | b | 筆順の変化 |
| エ | a | 点画の連続 | — | b | 筆順の変化 |

第二 問 ある中学校の体育委員会では、中学生の体力が低下しているという全国調査の結果が話題となり、委員会が主体となって、昼休みに運動の時間を設けることになりました。そこで、生徒の考えを取り入れた企画とするために、全校生徒を対象にアンケートを実施します。次は、体育委員会で作成中の「アンケート用紙の下書き」と、アンケート係のAさんたち三人が行った【話し合いの一部】です。あとの問いに答えなさい。

【アンケート用紙の下書き】

運動の企画に関するアンケート

体育委員会では、昼休みに10分間の運動の時間を設けたいと考えています。皆さんの考えを取り入れた企画としたいので、次の質問に対して、あてはまるもの1つに○を付けてください。
ご協力をお願いします。

質問1 運動の企画に取り組むんだったら、あなたはどのような単位で参加したいですか。

ア 個人 イ グループ ウ クラス

質問2 あなたはどれくらいの頻度で運動の企画に取り組みたいですか。

ア 毎日 イ 1日おき ウ 週1回

質問3 次の中で、あなたが取り組みたいと思う運動はどれですか。

ア ランニング
イ 縄跳び
ウ ダンス
エ ポール
オ 体力測定コーナー

【話し合いの一部】

① <Aさん> 【アンケート用紙の下書き】を見直して、アンケートがさらによいものになるよう、改善点を挙げていこう。これから、このアンケートの表現と、質問の形式について話し合うよ。まず、質問に入る前の文章の表現はどうか。

<Bさん> このアンケートの目的は伝わるけれど、体育委員会が運動の時間を設けることになった理由も伝えられないかな。

<Cさん> 全国調査の結果の資料をよく読んでみて、その文章の一部を

② したらどうだろう。運動の時間を設けることに説得力を持たせることができるし、アンケートを実施する必要性もいっそう伝わると思うよ。

<Bさん> そうだね。そのときは、資料の③をしっかり示そうね。

<Aさん> なるほど。改善点として取り入れよう。次に、質問や選択肢の表現はどうか。

<Cさん> 質問1について、この質問には話し言葉のくだけた表現が含まれているから、書き言葉に直した方がいいね。

<Aさん> そうだね。アンケートは多くの人が読むものだから、適切な表現にしたいね。そのほかに気になる点はないかな。

<Bさん> 質問2について、アンケートの対象は全校生徒だから、「頻度」という言葉は一年生には難しいかもしれないね。「回数」など別の言葉に改めることで、質問内容が正しく伝わると思うよ。

<Cさん> なるほど。私は気にならなかったけれど、一年生のことを考えれば、Bさんの意見のとおり言葉を変えた方が正しく伝わりそうだね。

<Aさん> では、次の話題の、質問の形式について話し合おうか。

<Bさん> 質問1と2については、答えやすさや集計のしやすさを考えても選択肢が適切な形式だと思っけれど、質問3については、記述式にして自由な考えを引き出した方がいいと思うよ。

<Aさん> Bさんは、質問3の形式を記述式にした方がいいという意見だけれど、Cさんはどうか。

⑤ <Cさん> 私も、自由な考えを引き出すために、記述を取り入れるという考えには賛成だよ。ただし、記述式だと、さまざまな考えを引き出せる反面、記述内容を読み取って整理することが難しくうだね。選択肢のまま、質問3の選択肢に「その他」を追加して、そこに記述欄を設けるといいのかな。

<Bさん> なるほど、そうだね。あと、質問3の選択肢には、伝わりづらいものや選択肢としてふさわしくないものがあるね。

<Cさん> そうだね。選択肢の「エ」は、この表現だと説明不足に感じると、「オ」は運動とは言えないかな。

⑥ <Aさん> 選択肢の表現の適切さも吟味したいけれど、今の話し合いの話題は質問の形式についてだから、選択肢の表現については、またあとで話し合おう。二人の意見を踏まえて、質問3は選択式と記述式を組み合わせるといふ方向で検討していこうか。

問一 【話し合いの一部】の中の「アンケート用紙の下書き」を見直して、「で始まるAさんの発言について説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。」

- ア 話し合いのねらいを述べたうえで、話し合う際の話題を提示している。
- イ 自分の立場を明らかにし、適切な根拠を挙げながら意見を述べている。
- ウ 話し合いの中で、分からないことを質問したり確認したりしている。
- エ 話の構成や順序を工夫しながら、問題点を分かりやすく指摘している。

問二 【話し合いの一部】の中の②、③にあてはまる言葉の組み合わせとして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ② 改変 | ③ 訂正
- イ ② 出典 | ③ 引用
- ウ ② 引用 | ③ 出典
- エ ② 訂正 | ③ 改変

問三 【アンケート用紙の下書き】の中の~~~~線部「取り組むんだったら」を、適切な書き言葉に改めて、十字以内で答えなさい。

問四 【話し合いの一部】の中に「回数」など別の言葉に改めることで、質問内容が正しく伝わると思うよ。」とありますが、このBさんの発言の意図について説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア アンケート対象者の回答意欲を喚起し、企画提案者の熱意を率直に伝えようとしている。
- イ アンケート対象者の語彙力を踏まえることで、生徒全員から正確な回答を得ようとしている。
- ウ アンケート対象者の学習の実態を考慮し、全校生徒の表現力を高めようとしている。
- エ アンケート対象者の問題意識に訴えることで、大事なことを重点的に伝えようとしている。

問五 【話し合いの一部】の中の「私も」で始まるCさんの発言について説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア このあとの話し合いの論点を提示して、自分の考えと異なる点を指摘し、具体例を挙げて反論している。
- イ 自分の経験を話したり、ほかの人の経験を聞き出したりして、全員の考えを引き出そうとしている。
- ウ 自分の意見にこだわらず、ほかの人の意見の納得できるところを見つけ、柔軟に意見を変えている。
- エ ほかの人の考えに対して賛同しながらも、工夫できることを加えて、よりよい案を提示している。

問六 【話し合いの一部】の中に「今の話し合いの話題は質問の形式についてだから、選択肢の表現については、またあとで話し合おう。」とありますが、次の文は、このAさんの発言の意図についてまとめたものです。□にあてはまる適切な表現を考えて、十五字以内で答えなさい。

話し合いの展開を捉え、□ことをねらいとして発言している。

第三 問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

人の髪を結うことが好きな六歳の靖成は、相撲観戦に出掛けた際、力士の髪を結うところを見学させてもらった。中学校三年生になった靖成は二人に再会し、かつて刺々しかった若関の変化に驚く。床芝の話から二人の関わり合いを知った靖成は、思わず自分の思いを口にする。

「若関のこと、俺……じゃない、僕はほとんどわかってないんですけど。あの人が変わったのは、床芝さんのおかげでもあるんじゃないかって、思うんです」

「……俺のおかげ？」

床芝がきよんとして聞き返す。靖成は頷いて続けた。

「だって表情が昔と違って、なんか穏やかになってたんですよ。床芝さんが毎日一生懸命鬘を結ってくれて、その思いが伝わったから、あの人も優しくなったのかなって。僕には、そういう風に見えました」

若関だけでなく床芝のことも、靖成はほとんど知らない。でも、これだけわかる。鬘を結う前に毎回爪の長さを確認するほど、真面目であること。どんなに叱られても、若関と真剣に向き合おうとする床芝は、誰よりも優しいこと。そんな人が毎日懸命に鬘を結ってくれたら、あの若関だってきっと、気を許してくれるはずだ。

床芝は何も言わなかった。ただ、軽く眉間に皺を寄せて、腕を組んでいた。

——あ。変なこと言ってしまったかも。

途端に指先が冷たくなる。すみませんでしたと謝ろうとしたそのとき、
「なるほどなあ」

さっぱりした声が、隣から聞こえた。

「若関は絶対そんなこと言わないし、俺だってまだ全然、一人前の床山じゃないんだけど……本当にそうだったら嬉しいな」

「絶対そうですよ！」

思った以上に大きな声が出て、自分でも驚く。なんで俺、こんなに熱くなってるんだろう。

「僕、前に巡業に来たときの記憶がほとんどないんですけど、床芝さんのことはちゃんと覚えていたんです。それは床芝さんが、かっこいい大銀杏を見せてくれて、でもって、子どもの僕にも優しくしてくれて……ええと、つまり」

だんだん支離滅裂になっていく靖成の言葉を引き取るように、床芝が口を開いた。

「ありがたいな。そう言ってくれるだけで充分だよ」

その横顔に穏やかな笑みが広がっているのを見て、靖成はああそっか、と気づく。

昔、床山の仕事に惹かれたのは、ただ単に髪を結べるからじゃない。腕も氣立てもいい、床芝に憧れたからだ。

床山への関心を捨てた、過去の自分がだんだん恥ずかしくなってくる。「変」とからかわれるのが嫌だなんて、その仕事に就いている床芝に失礼ではないか。

床芝が一瞬、腰を浮かせた。もうすぐ仕事に戻る時間なのかもしれない。

「あのっ、床芝さん！」

思いきって呼び止めると彼は、ん？ とこちらを振り返った。

「一つ聞いておきたいんですけど。床山になる前、迷いませんでしたか？ だってほら、男性なのに髪を結ぶ仕事に就くの？ みたいな、変な目で見られることって、なかったのかなーって」

「迷わなかったよ」

即答だった。どうしてですか、と問うよりも先に、彼が続けた。

「俺は相撲が好きだから、他の道は考えられなかった。男が髪結うの？ とか抜かす奴はいたかもしれないけど、それはただ、今までそいつの周りに、髪を抜う仕事に就いている男がいなかっただけだ。男が髪を結ったって、何の問題もないのに。そうやって『男はこうあるべき』って勝手に決めつける、了見の狭い奴の言うことなんか気にするだけ無駄だ」

礼を言われたときや、若関について語っていたときとは、全然違った。彼の、床山としての矜持が表れているかのような、ずいぶんきっぱりした口

調だった。靖成は相槌を打つのも忘れて、その言葉に聞き入っていた。

「そろそろ戻らないと。何年ぶりに会えてよかったよ。じゃ、また。元気な」

床芝が立ち上がり、昔みたいに手を振る。踵を返す直前でもう一度、床芝さん！ と呼び止めた。もうあまり時間は無い。気づけば、言葉が勝手に口から飛び出していった。

「あのっ、床山になるには、どうしたらいいんですか？」

床芝が目丸くする。靖成自身も驚いていた。床芝を見て、かっこいいとか、自分もこうありたいかと思っただけで、床山になるにはどうしたらいいかなんて、いくらなんでも先走りすぎだ。

すみません今のは忘れてください、と言おうとしたら、床芝がエプロンからメモ帳とペンを取り出した。ささっと何かを書きつけると、一枚めくって靖成に差し出した。

「これ、俺んちの電話番号。地方場所や巡業のときは留守だし、かけても嫁が出るかもしれないけど、念のため渡しとく」

「えっ」

反射的に伸ばしかけた腕が止まる。そのまま固まっていると、空の右手に容赦なくメモがねじ込まれた。

「別に今すぐじゃなくていい。床山になりたいと、本気で思ったらかけてくれ。俺が面倒見てやるから。じゃあな」

小さく右手を上げたかと思うと、彼はくるりと背を向けて、力士たちの元へ帰っていった。靖成はその背中に向かって、聞こえるように礼を言うだけで精いっぱいだった。

席に戻ったあと、靖成は床芝からもらったメモを開いた。走り書きのはずなのに、彼の字はちつとも形が崩れていなかった。その丁寧に書かれた字を見た瞬間、決意が固まった。

⑤ この人と一緒に働きたい、と。

(鈴村 すずむら ふみ「大銀杏がひらくまで」による)

*をつけた語句のへ注V

床山——力士の髪を結び、整える職業の人。

大銀杏——ここでは、力士の髪型の一つ。

矜持——誇り。自負。

踵を返す——引き返す。

問一 本文中に「すみませんでしたと謝ろうとした」とありますが、靖成は、どのようなことに対して「謝ろうとした」のですか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 年下にもかかわらず、床山としての床芝の技術を評価したこと。
- イ 付き合いが浅いのに、床芝の性格を真面目で優しいと褒めたこと。
- ウ 二人をよく知らないのに、若関の変化を床芝の影響だと語ったこと。
- エ 見てもいない若関の表情を、昔より穏やかになったと話したこと。

問二 本文中に「ああそっか」とありますが、次の対話は、ここでの靖成の思いについて話し合ったものです。あとの(一)、(二)の問いに答えなさい。

- 〈Xさん〉 靖成は、床芝の言葉を聞き、表情を見て、かつて床山の仕事に惹かれたのは、Aと気づいているね。
- 〈Yさん〉 うん。靖成は、その頃の自分の気持ちを思い出したんだよ。
- 〈Xさん〉 そうだね。だからこのあとのところで、床芝を前にして、以

前、Bとさえ、床山への関心を捨てたことを恥じただね。

(一) A にはあてはまる表現を、本文中から十八字でそのまま抜き出して、はじめの五字で答えなさい。

(二) B にはあてはまる適切な表現を考えて、三十字以内で答えなさい。

問三 本文中に「靖成は相槌を打つのも忘れて、その言葉に聞き入っていた。」とありますが、ここでの靖成の描かれ方を説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 床芝の仕事に対する思いを一心に聞く靖成が、三人称の視点から描かれている。
- イ 床芝の相撲への深い愛情にあざんとする靖成が、三人称の視点から描かれている。
- ウ 力士に向き合う床芝の苦しさと共に感ずる靖成が、床芝の視点から描かれている。
- エ 人生の先輩としての床芝の助言に反発する靖成が、床芝の視点から描かれている。

問四 本文中に「靖成自身も驚いていた。」とありますが、次の文は、このときの靖成の心情を説明したものです。 にはあてはまる言葉を、本文中から十三字でそのまま抜き出して答えなさい。

仕事に戻ろうとした床芝に対してとっさに出た「床山になるにはどうしたらいいか」という自分の発言は、 と感じ、自分自身でも驚いているということ。

問五 本文中に「この人と一緒に働きたい」とありますが、靖成がそのように決意した理由を、五十字以内で説明しなさい。

第四 問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

画家は、たんに「美しい」花や夕焼けを描くのではない。熱帯魚の模様、どれほど絶妙な色の配置になっているか、そんなことも問題ではない。問題なのは、人間は世界を「どう見ているか」ということだ。これは芸術にしかできないことだ。

① 絵画は、いわば、脳の「実験レポート」なのだ。

では、脳とはいったいなにか？

それを知るには、絵画を分析するというやり方があってもいい。絵とは、脳そのもののからだから。

たとえば、シカゴ美術館にも展示されていたセザンヌとモネの絵を例に考えてみよう。このふたりの画家は、ほぼ同時代に活動したせいも、画風が似ている。どちらも、筆のタッチがそのまま残り、塗り残したところも多い。とくに絵に近づいて見ると、たとえば人物画でも、それが「人間の顔」であるより「絵」に見える。筆のタッチが、絵具が、そこに見えるからだ。

セザンヌやモネ以前の絵画は、そうではなかった。絵に近づいても、たとえば肌は細かく塗られ、そこには筆のタッチはなく、あたかも肌そのもののような質感が描かれている。ともかく、セザンヌとモネのは、それほど似た作風のものだ。

しかし「脳」という視点から見るとき、このふたりの画家が描き出す世界は、まったくちがっている。

モネが描いているのは、ひたすら「見える」世界である。それは目のなかにある「網膜」に映った像を、そのままカンヴァスに描いた世界だ。

見たものを見たとおりに描くのは、ルネサンス以来の、ヨーロッパ絵画の伝統である。モネは、そんな美術史のひとつの到達点にいる画家だ。ところが不思議なことに、見たものを見たとおりに、徹底して描くと、それは見たものとは別のものになってしまう。ぼくたちは、けっしてモネの絵のように世界を見ていない。

モネは、世界を光と色の点に分解する。いや「分解」するのではない。モネには、そう見えるのだ。たしかに網膜に映るのは、そんな光景である。目の網膜には、桿体と錐体という二種類の細胞がびっしりと並んでいる。いっぽうは明暗、つまり光のあるなしを感知する。もういっぽうは、色を三原色に分解し、どれかの色に反応する。つまり世界の光景を、光と色の点に分解し、その情報を脳に送っている。

モネという天才は、脳や目の生理学的な働きなど知らなかっただろうが、なぜか世界がそう見えることを察知し、カンヴァスにそのような絵を描いた。まさに目の生理的機能の実験レポートである。

いっぽうセザンヌが描くのは、それとはまったく正反対の世界だ。セザンヌは、目に見えたものを見たとおりに描こうとはしなかった。そもそも人は「目」だけで世界を見ているのか。視覚ということに絞っていえば、たしかにそうだろう。しかし人は、目で見て、耳で聞いて、手でふれて、と五感を使ってこの世界を生きている。そこから「視覚」だけ取り出して、それを絵にするのは不自然ではないか。五感で感じる世界を、絵という視覚表現に集約する。それこそが、世界のあるがままの姿ではないか。いや「世界のあるがままの姿」ではない。ぼく的な言い方をさせてもらえば、目ではなく「脳が見ている」世界である。

セザンヌは、脳科学のことは知らなかったが、画家の直感でそう考え、そのようなスタイルの絵を描いた。セザンヌの絵には、ものの存在感や触覚、そういう目と目の網膜だけではとらえられない感覚があふれている。

セザンヌは、自分がどのような絵を描いているか、よく知っていた。それがモネが描いている世界とどうちがうかも。だからセザンヌは、モネについてこういつている。

「モネは、目にすぎない。しかしそれは、すごい目だ」

モネがいかに「目」を徹底した画家であったかは、セザンヌもわかっていた。かつて誰も到達したことがないほどの世界にまで踏み込んだ天才であることも。しかし「それは目にすぎない」。セザンヌは、目ではない、もつと脳の全体で感じている世界を描こうとしたのだ。たしかに、絵は、脳の実験レポートである。

では人はなぜ、芸術作品に感動するのだろうか。それは芸術作品というのが、ぼくたちが日常の生活のなかではなかなか感じられないなにか、しかしこの世界にたしかに存在するなにかを、つかみとって見せてくれるからである。

その「なにか」とは、なにか。

それはここまで書いてきたように、「脳」である。もちろんぼくたちは、毎日、脳を使って生きている。だから脳の働きをつかみとって、それを見せにくれたからといって、感動などしない。

しかしぼくたちは、本当に「毎日、脳を使って生きている」のだろうか。ぼくたちの脳に秘められていて、まだ自分では見えていないなにか、そういうものが脳にはたくさんあるのではないか。人間の脳というのは、ぼくたちが考える以上に、未知の可能性を秘めたものなのかもしれない。

芸術家とは、そんな「脳の可能性」をつかみとって、作品というかたちにする人間である。そのようなことができる人を天才と呼ぶ。

しかし、ぼくたちの能力をこえた、天才だけにしか見ることのできない世界があるとしたら、それはぼくたちにとつて無関係のものだ。芸術作品を見て感動できるのは、それを感じ、わかる力が、ぼくたちの脳の中にあるからである。

美術館で、画家の「ものの見方」を絵をとおして知り、そこに驚きを感じるの、それと同じ能力が自分のなかにもあることを知った驚きでもある。芸術とは、天才の世界をかいまみることではない。まだ知らなかった自分の可能性に出会って、そうしたものが自分のなかにあることを知る。それが芸術の感動というものの正体だ。

(布施 英利「はじまりはダ・ヴィンチから 50人の美術家を解剖する」による)

*をつけた語句のへ注▽

セザンヌとモネ——どちらも十九世紀後半に活躍したフランスの画家。
筆のタッチ——ここでは絵画の筆づかいのこと。
カンヴァス——油絵用の画布。キャンバス。

問一 本文中に「^①絵画は、いわば、脳の『実験レポート』なのだ。」とありますが、次の文は、このことについて述べたものです。あとの(一)、(二)の問いに答えなさい。

筆者は、絵画から、A がわかると考えたため、絵画を「脳の『実験レポート』」という言葉で表現した。そして、そのことを説明するために、同時代に活躍し B 画家の、モネとセザンヌを取り上げている。

(一) A にあてはまる表現として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 画家がどのような苦悩を持っていたか
- イ 人間の目に見える美しさの限界
- ウ 先人の表現技法や当時の流行
- エ 画家が世界をどのようにとらえているか

(二) B にあてはまる言葉を、本文中から七字でそのまま抜き出して答えなさい。

問二 本文中に「^②ひたすら『見える』世界」とありますが、次の文は、「モネ」の絵について、筆者の考えを説明したものです。 にあてはまる適切な表現を考えて、三十文字以内で答えなさい。

モネは、脳や目の生理学的な働きなど知らなかったと思われるが、 ように見える絵を描いている。

問三 本文中に「^③目ではない、もつと脳の全体で感じている世界を描こうとした」とありますが、次の文は、「セザンヌ」の描き方について、筆者の考えを説明したものです。 にあてはまる言葉を、本文中から八字でそのまま抜き出して答えなさい。

セザンヌは、画家の直感によって、「視覚」だけではとらえられない を、視覚表現としての「絵」にまとも上げている。

問四 本文中に「^④芸術の感動というものの正体」とありますが、ここで筆者が述べる「芸術の感動というものの正体」とは、どのようなものですか。五十五字以内で説明しなさい。

問五 本文の論の進め方について説明したものととして、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 絵画についての問題を提起したあと、主張の根拠として著名な芸術家の言葉を参照し、持論を展開している。
- イ 絵画についての話題を提示し、主張を支える具体例を挙げ、科学的な知見を援用して美術史を整理している。
- ウ 絵画についての自分の見解を述べ、例を対比的に提示しながら、問いかけを積み重ねて主張をまとめている。
- エ 絵画についての仮説を立て、絵画の観察と自身の経験を照らし合わせながら、仮説の有効性を検証している。

第五問 次の【I】の和歌、【II】の物語と、それらについての【対話】を読んで、あとの問いに答えなさい。

【I】

冬ごもり春さり来ればあしひきの山にも野にもうぐひす鳴くも
(春が来ると)
(山にも野にもうぐひすが鳴くよ)

〔万葉集〕による

【II】

先帝の御時、卯月のついたちの日、鶯の鳴かぬを詠ませ給ひける、公忠
(先帝のご時世に)
(鳴かないことを歌にお詠ませになられた時)

春はただ昨日ばかりを鶯のかぎれることも鳴かぬ今日かな
(春はつい昨日終わったばかりなのに、うぐいすが決めているかのように)

となむ詠みたりける。
(詠んだのであった)

〔大和物語〕による

*をつけた語句の△注▽

卯月のついたちの日——旧暦四月一日。この日から夏がはじまる。

【対話】

〈Xさん〉 【I】の和歌の「冬ごもり」は「春」、「あしひきの」は「山」
 という特定の語を導き出す **A** だね。
 〈Yさん〉 うん。鶯の鳴く声によって **B** を詠んでいるよ。
 〈Xさん〉 【II】の物語の中の和歌は、「かぎれること」という表現を
 用いて、鶯が **C** と捉えているところが面白いね。
 〈Yさん〉 昔の人々にとって、春と鶯は強く結びついていたんだね。

問一 本文中の「給ひける」の読み方を、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに改めて、全てひらがなで答えなさい。

問二 【対話】の **A** にあてはまる表現技法として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 擬人法 イ 枕詞 ウ 体言止め エ 掛詞

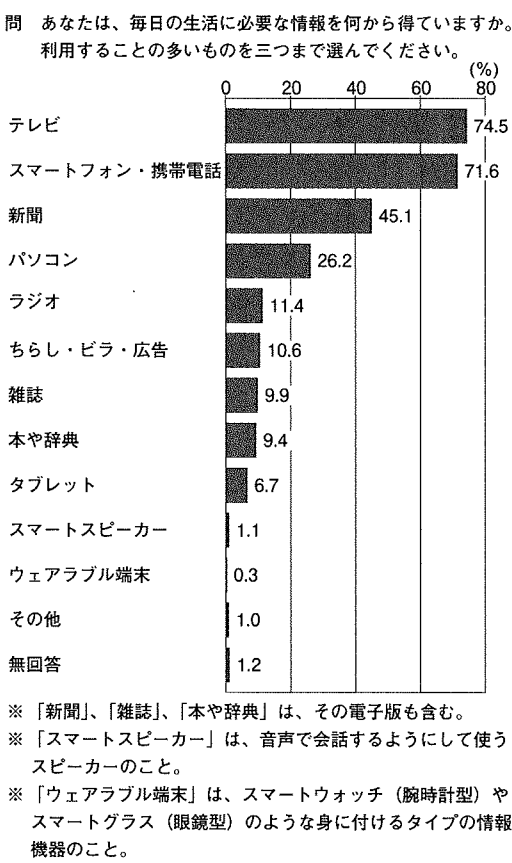
問三 【対話】の **B** にあてはまる内容として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 冬ごもりならではの楽しみ イ 山野から去りゆく春の風物
 ウ 冬ごもり中の自然の厳しさ エ 山野にやって来る春の気配

問四 【対話】の **C** にあてはまる適切な表現を考えて、二十五字以内で答えなさい。

第六問

次のグラフは、全国の十六歳以上の人を対象に行った世論調査の、「毎日の生活に必要な情報を何から得ているか」という質問に対する結果です。あなたがこのグラフから読み取ったことと、その読み取ったことに対するあなたの考えを、百六十字～二百字で書きなさい。



(文化庁「令和4年度『国語に関する世論調査』」より作成)